



宇都宮釣り天井事件

しかし、正純は国松への忠誠から、いつか家光を亡きものとする機会をうかがい始めました。

そんなおり、家光の日光東照宮社参が執り行なわれることとなり、宇都宮城は、江戸から日光へと続く日光道中であり、これを好機と考えた正純は、さっそく家光に宇都宮城での宿泊を願いあげ、御宿所の新築工事を開始しました。しかし、この宿所の湯殿は、綱を切れば天井が、湯船がけて一気に落ちる仕掛けが施されていました。何も知らずに江戸を出発した將軍家光は、まさに絶体絶命の虎口へ飛びこもうとしていたのです。

ところが、この計画はふとしたことから露見してしまいます。釣り天井の工事を担当した大工たちは、將軍暗殺が成就するまで城中に軟禁されていましたが、この中の奥五郎という若者が恋人に会うため、城を抜け出してしまったのです。それを知った正純は、奥五郎ほか大工を皆殺しにしますが、時すでに遅く、奥五郎の相手の知るところとなって企みは発覚し、正純は幕命を奉じて切腹、暗殺は寸前で防がれました。これが世に有名な「宇都宮釣り天井事件」の顛末です。

大久保武蔵

しかし、なぜ釣り天井などと大きな仕掛けをつくる必要があったのでしょうか。將軍を暗殺するだけなら、もっと簡単な方法があるはずですが。それに、跡目争いにやぶれたから家光を殺すという発想も、勸善懲惡物の悪役のように単純すぎます。

実は、これは『大久保武蔵』に初出する実録物であり、一心太助も

二元政治

慶長5年(1600)に関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、征夷大將軍に就任して江戸に幕府を開きました。しかし、そのわずか2年後、家康は將軍職を息子秀忠にゆずり、駿府に隠居してしまいました。これは將軍職が徳川家の世襲制となったことを世に示すためともいわれていますが、政治の実権は完全にゆだねられたのではなく、江戸と駿府の二元政治がはじまりました。

本多正信と正純

本多正純の父である正信は、鷹匠という低い地位から昇りつめた人物ですが、家康の信任はあつく、「君臣の間、相遇うこと水魚のごとし」といわれるほどでした。息子の正純も同様に寵愛され、親子して幕府の実権を握っていました。

家康が駿府に移ると、正信は息子の正純を家康に付かせ、自分は江戸の秀忠のもとで、二つに分かれた政治の実権を握ろうとしました。しかし、元和2年(1616)に家康が75歳の生涯を閉じると、その後を追うように正信も亡くなり、最大の庇護者二人を失った正純の不幸はここにはじまりました。

権力闘争

家康と正信の死後、正純は江戸の



復元された宇都宮城の清明台と土塁

秀忠のもとで、第一の実力者として仕えるようになりました。しかし、もともとの秀忠の側近たちにとって、新参者が自分たちを出し抜くのは面白くありません。家康の側近の一人だった金地院崇伝が、細川忠興に宛てた書状を見ると、元和2年5月には正純が第一の権力者とされていますが、4ヶ月後には秀忠の側近である土井利勝に取って代わったように書かれています。おそらくは正純が着任するやいなや、追い落とすの画策がはじまったのでしょう。

宇都宮への移封

しかし、これらは水面下の出来事で、表立てでは正純の権勢は健在であり、元和5年には下野小山3万3千石から一気に加封されて、宇都宮15万5千石の城主となりました。宇都宮は日光街道の要衝でしたので、前城主の奥平忠昌が幼君で頼りないと判断されたためといわれています。しかし、正純はこれを辞退したといわれており、加封の背後に隠された動きを察するところがあったのかもしれないかもしれません。

ともあれ、宇都宮に移った正純は、城の拡張と街道の付け替えなど、城下の大整備を開始しました。この工事は元和8年に執り行われる予定の、秀忠による日光東照宮社参に間に合

わせるため、昼夜兼行で進められました。

日光社参の謎

そして元和8年4月13日、秀忠は社参のため江戸を出発して、15日に正純の待つ宇都宮城に宿泊しました。もちろん釣り天井など落ちるはずもなく、秀忠一行は無事に宇都宮を出発し、翌16日には日光に到着しました。しかし、法要を済ませて帰路へつく20日に異変は起こりました。突然、將軍一行は日光を出発し、往路は4日かかったところを、宇都宮に立ち寄ることもなく、2日という異常な速さで江戸へ帰ってしまつたのです。一説には前宇都宮城主の祖母であった加納殿が、孫の国替えを恨み、將軍へなんらかの讒言をしたなどと伝えられますが、詳しいことはわかっていません。

改易、そして幽閉

その4ヵ月後、正純は改易となつた山形城の受け通りを命じられ、現地におもむきました。すると、なんとそこに幕府の使者が到着し「將軍家へのご奉公よろしからざる」という理由で宇都宮の召し上げと、出羽由利5万5千石への減封を命じられました。正純はこれに反発し、5万5千石を返上すると答えたところ、秀忠の怒りを買って改易され、一度

登場する本だといえは、だいたいご理解いただけるのではないかと思います。

「宇都宮釣り天井事件」は芝居や絵草子に取り上げられ、結末も一味がみずから釣り天井の下敷きになって壊滅するといったような豪快な脚色がなされました。

ところで、これは全くのフィクションではなく、モデルとなった事件が存在しました。まず悪役の本多正純は実在の人物であり、少年の頃から家康に仕えて頭角をあらわすついに側近の筆頭となって家康に次ぐ権力者となりました。しかし、こうした彼の全盛期は短く、突然終わりを迎えました。この終焉は不可解なもので、当時の人々は色々々憶測をめぐらせました。そうした中で生れたのが釣り天井事件だったのであります。それでは、本多正純に一体何が起きたのか見ていきたいと思います。

も許されることなく、秋田県の横手で幽閉されたまま73歳の生涯を閉じました。

おわりに

正純の改易は不可解なことが多く、とくに日光社参の顛末は謀反の疑いがあったのではないかと、大名から庶民までさまざまな憶測がなされました。元禄15年(1702)に新井白石が記した『藩翰譜』には、「御湯殿の板敷路まば落ちんように巧み、其下に悉く剣たち並べ…」などと書かれていたので、カラクリ城のうわさは早くから囁かれていたようです。そして、『大久保武蔵』のような悲談本では、落とし穴から派手で客受けする釣り天井へと進化を上げていき、今も伝わる「宇都宮釣り天井事件」が創り上げられていったのです。

(文：江口知秀)



大谷石の採掘場跡 宇都宮特産の大谷石は城下整備工事に使われた

大工奥五郎庄屋藤左門女お早に恋慕の図